

『完璧な挨拶』

中村克也

2,718 字

○あらすじ

引っ越した先で出会った「完璧な挨拶」をする清掃員と挨拶を交わすうち、私はいろいろなことに気づく。行動も変わる。

毎朝挨拶を交わすのが当たり前になったある日、突然、その清掃員は姿を消してしまう。

「おはようございます。」

その声をはじめて聞いたとき、『完璧なおはようございますだ！』と思った。思わずうつむいていた顔を上げた。

そう、「丁寧な」でもなく、「ぶっきらぼうな」でもなく、「完璧な」である。それまでの人生で一度として感じたことのない、反射的な感想である。

それは、「おはようございます！」でもなく、「おはようございまーす」でもない、適度に親密で、でも過度に立ち入ってこない、それでいて、その時間帯にふさわしい澁刺とした要素まで入っていた。そんな完璧な「おはようございます。」の声の主は、作業服を着て箒を持った初老の男性であった。

その日は、一応東京都内であるものの、すぐ目の前の川を渡れば某県、という、勤務先までの通勤時間と負担できる物件価格とのせめぎ合いで最適解(と思われる)新居に転居して、最初の出勤日であった。

最寄り駅の近くには、誰もが名前を知っている大手製薬会社のオフィスが入ったビルがあった。古びた団地が多い周囲からちょっと浮いた感じの、クリーンでモダンなそのビルの敷地には、ビルの外壁からかなりの幅をとった植栽が巡っており、さらにその周りを、レンガ張りの歩道が巡っていた。朝の光はその東側にある大きな公団の建物に遮られ入ってこないが、かえって朝のすっきりとした空気が感じられる空間である。

その声の主はどうか、そのビルのオーナーである製薬会社から委託をうけて敷地内外の清掃をされている方の方である。みれば、私と彼の間には街路樹の落ち葉があり、彼の向こうにはない。

「おはようございます」

当然のように私の口から挨拶の言葉が出た。自分でも驚いた。路上で見ず知らずの人と挨拶を交わすなど、これまでなかった。

そのまま軽く会釈を交わし、私は彼が掃き清めた歩道を歩き始めた。顔を上げ、大事なものの上を歩くように、一步一步を意識しながら。

以来、毎朝その声の主と挨拶を交わすようになった。半年、1年を過ぎても、変に馴れ馴れしくなることもなく、適度に親密で、でも過度に立ち入ってこない、その心地いい距離感は変わらないまま。

ほぼ毎日挨拶を交わすうちに、いろいろと分かってきた。出会ったのは(といっても挨拶以外の会話はしていないが)秋で、落ち葉が大量にあり非常に大変そう。集めた落ち葉をいれるゴミ袋が等間隔で並ぶ。春は春で街路樹が桜のため、歩道はピンク色になる。見るぶんには綺麗だが、掃くとなると大変そうで、花びらは小さいがためにレンガ敷きの歩道の隙間に入り込み、すっきり綺麗とはならない。雨の日はお休みになるようだが、一番大変そうなのは、夜のうちに雨が降った翌朝である。落ち葉にしるゴミにしる濡れて路上に張り付くので作業がなかなか進まない。

そんな遅々として作業が進まず、私であればイライラするようなときであっても、「おはようございます。」に含まれるは澁刺の要素は分量変わらず感じられる。

そして、彼の向こうには掃き清められた歩道が広がっているのである。

私は顔を上げて歩くようになった。そして、それまで見えなかったいろいろなものが見えるようになった。自分の会社に行けばフロアでゴミを集めたり、トイレを掃除している方がいることもはじめて気づいた。いや、正確に言うと、気づいていたが、自分には関係がないと思い込んでおり、認知できていなかったというべきだろう。こうした方々に自分から挨拶するようになった。

また、ゴミや空き缶が落ちてると拾ってゴミ箱に入れるようになった。時には拾い上げた空き缶に飲み残しが入っていて手を汚すこともあり閉口し、後悔するようなこともあったが、翌朝声の主と挨拶を交わすと不思議とさっぱりした気持ちになって、特別の気合いや決心もなく、ゴミや空き缶が落ちている場面に出くわせば手が出るのであった。

2年経ち、3年経ち、4年経ったある日、世界的な経済危機が起こった。私の勤務先も影響を受け、売り上げは激減。対応するために早朝から出社する日々が始まった。声の主と挨拶を交わすことができなくなった。数ヶ月後、やっと仕事も落ち着き、以前の時間に家を出るようになった。密かに声の主と挨拶を交わすのを楽しみにして。しかし声の主はいなかった。少しずつ家を出る時間を変えてみたりしたが、2度と会うことはなかった。そもそも誰も掃除をしなくなった。思い切ってビルのエントランスに立ち寄り、そこにある張り紙を見て謎が解けた。このビルに入居していた製薬会社はオフィスを閉鎖、移転していたのだ。その後調べたところ、この製薬会社は昨年合併をし、本社から離れたオフィスの移転を考えていたところ今回の経済危機で計画を早めた、とのことであつた。

しばらくすると綺麗に刈り込まれていたビルの周りの植栽は雑草が生い茂るようになり、その一部は歩道まで伸びてくるようになった。落ち葉はそのままになった。いままで当たり前と思っていた風景がいかにも人の手で維持されていたか、改めて思い知った。そのたび、あの声の主を思わずにはいられなかった。

翌年春、私は昇進した。仕事ができるから、ということであれば手放しで喜べるころだが、評価されたのは職場の雰囲気改善了こと。聞けば、私が同じフロアの他部署まで回って毎朝挨拶をしている(声の主に会ってから自然とやるようになった)ことや、ゴミ拾いをしていることを真似をする人が出てきた。結果、職場の雰囲気が良くなり、部署内だけでなく、部署を超えた連携もスムーズになった、ということらしい。素直に声の主に感謝である。というか、本来の仕事も評価してもらえよう頑張らねば。

昇進と同時に異動をした。異動といっても同じビルのワンフロア下の部署の担当になっただけで、定期券も変わらない。

異動後のフロアでトイレに行くと、洗面台の周りの跳ねた水を手を拭いたペーパータオルで拭き取っている若い社員がいた。私の新しい部下だ。その後も度々見かける。自分が跳ねさせた訳ではない。

「キレイ好きなんだね。」

ある日、声を掛けた。

「自分でも変なんですよねえ。ほんと最近なんですよ。なんか手がでちゃうんですよね。あ、部長もゴミ拾ったりしてますよね？キレイ好きなんですか？」

と逆に質問された。キレイ好きとは違うな、と思いながら、

「俺の場合は引越してからだな。」

と答えた。答えてから我ながら訳の分からない答えだな、と思ったその瞬間、

「いや、実は私も引越してからなんです。家から駅に行く途中で掃き掃除している人がいるんですけど、そうやって綺麗にしているのをみると、なんかね、感化されちゃうんですかね。しかも、気持ちいい挨拶してくれるんですよ。『おはようございます。』って。」